

---

# 桜の木の下で

美波可奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜の木の下で

### 【Zマーク】

N8788E

### 【作者名】

美波可奈

### 【あらすじ】

ある日出会った少女は強い瞳を持っていた

## 強い瞳を持つ少女 1

桜の木の下で君と一緒に歩いていこう。ずっと一緒に歩いていこう。

俺が真理に誓つた言葉。

桜の木の下で君はうつすらと微笑んで。ありがとうと呟いた。

泉野真理。

初めて会つたときからずっと惹かれ続けたよ。

「真理ちゃん。一矢君。本当におめでとう。」

君が望んだみんなの祝福は嘘じやなかつた。みんなが祝福してくれるまで待つてと君は呟いて。何でだらうと思つていたら。

君のお姉ちゃんの影響だつたんだね。

君のお姉ちゃんは随分と辛い目にあつたつて？

だけど君のお姉ちゃんは俺にこう言つた。

「真理を幸せにしてくれるのは一矢君しかいない。」って。君に似た意志の強い瞳で俺の背中を押してくれた。

「結花さん。」

君のお姉ちゃんは君よりずっと小さくつて。

だけど君へ精一杯の心を送る。

「真理はね。トラブル体质だから随分と大変な思いしてきただと思つんだ。」

君のお姉ちゃんが言葉を紡ぐ。

「私が辛い時いつも傍にいてくれたんだよ。  
もう大丈夫だからってここにら辺で姉妹の絆は終わりにしなくちゃ  
ね？」

君のお姉ちゃんはそう言って。

ささやかな披露宴の次の日に姿を消した。

原因は真理と結花の両親に在ったんだけど。

教師だった結花は左遷された。

問題教師は飛ばそうと誓った教育委員会の思惑だった。

君は泣いたね。

遣る瀬無くて。

君は叫んだね。

祝福はしてもらえたけどみんな幸せになつて欲しいって

俺もそう思つよ。

## 強い瞳を持つ少女 2

俺が偶然出会ったのはそれこそ偶然じゃない。

必然的に神さまが出会わせて下さったんだと俺は思つてゐる。

それこそ今思えば俺があの日を選んで写真の専門の体験に行つたの  
だつて奇跡みたいなもんだし。

今から思えばあの日あの時間に家を出たのだつて。

あの日あの時間にあの駅に辿り着いたのだつて奇跡みたいだと思つ。

だつてあと1分遅かつたら俺は真理に会つてない。  
すれ違つてもいなかつたはず。

だからいくら有名でも知らなかつた。

泉野真理がこんなにも愛しい存在だなんて。

「一矢。本当に高校行かないの？」

「だーかーらーまだわかんないつて。

だつて俺叔母さんみたいになりたいんだ。」

俺はその日叔母の家にいたんだ。

そっちの方が写真の専門にも近かつたし。

何より叔母は写真家だったから。

俺の憧れの人だつたから。

人物は例外的で。

風景写真家の叔母は俺より5つ上なだけの人だつたから。

20歳で写真家で売れるつて。

そして何より若くで大成したくせに全然驕つたところもなくて。  
才能があつたんだなつて思う。

そしてよき理解者に出会い同じ人物写真家の叔父と結婚したのは19のころ。

真田美砂子。

それが俺の叔母の名前だった。

「一矢はそればっか。

私なんかすぐに追い越せるよ。

そんな事より高校ぐらい行きなさいって。行つてからでも遅くないから。」

叔母はそう悟すけど。

でも俺の決心は悪いけど変わらない。その時までは確かにそう思つてた。

### 強い瞳を持つ少女 3

「1番線に快速が止まります。白線の内側にお下がりください。」

聞きなれたアナウンスが駅構内に流れ。

俺は電車を待っていた。

其処へ大声が聞こえた。

「いや／＼助けて！…」

見ると1人の女性が半泣きで呆然とこちらを見つめていた。  
もう1人の連れと見られる女性が丁度駅のコンクリートに倒される  
ところだった。

俺の住んでる町ではこんな事はもう日常茶飯事になっちゃつてて。  
みんな又か的な視線しか送らなくなつていた。  
退廃的でみんな誰かを蹴落とすために生きている。

でも俺は少しばかりの奴よりはモラルがあつたから。  
これは助けないと反射的に思つて。

本当は別に見て見ぬ振りをしても良かつたのだけれど。  
流石にその女性2人を見たら綺麗な顔をしてたけど2人とも車椅子  
だつたから。

障害者には優しくしなくちゃ。  
変な意識燃やしちゃつて。

俺は人を搔き分けて現場に行こうとしたとき。  
綺麗な技が決まり。

イチャモンをつけてた奴らが宙を飛んだ瞬間を俺は見た。

「弱い奴に優しくも出来ないのか。」

透き通つた声と共に。

冷たい視線で睨んで。

まるでそいつらを凍りつかせるような眼差しで。

そいつは現れた。

「大丈夫か？」

手を差し延べコンクリに倒された女性に声をかけ。

「俺らは遊ぼうよって声をかけただけだぜ？」

リーダー格の男が一言そう言ったとき。

「襲うの間違いだろ？」

そいつは低い声でそう言って。

リーダー格の男を締め上げた。

「ぐるしつ！！」

「お前らがやつた事は单なる弱い者いじめだ。

強い奴に勝てないからつて腹いせにこんな事やるんじゃねえよ！

！」

「ふざけんなつ！！」

遂にキレた奴らがナイフを持ち出し。

女性2人は震え上がった。

「刺してみろよ！！！」

そいつは胸を張り大声で手刀を繰り出した。

そして形勢逆転。

そいつはナイフの刃を掴み血を流しながら。言つた。

「次はどいつだ？」



「覚えてるよっ……」

お決まりの捨て台詞でチンピラどもはナイフを抱え逃げていった。

「見せもんじゃねえよっ……」

そいつは名も名乗らざる。

女性2人を車椅子に乗せるのを手伝つて。

そして「やべつ。」と弦にて駅から出る道を歩き出した。

手のひらには血が滲んでいた。

でもそれを気にもせず前だけ見つめてずんずんと歩いていく。

俺はそいつの事が気になつて気になつて。

気になつてそいつが何処を手探して歩いていくのか見届けたくなつて。

ストーカーみたいに間隔をあけ後を付いていった。

そいつの後姿は堂々としていて。  
肩をいからせ歩いていく。

背は高く。

髪は長くて金髪で。

険しい瞳は前を向いて。

そしてその時話し声と共にカップルとすれ違つた。

「あれえ? 今の泉野じゃね?」

派手な化粧の姉ちゃんが振り向いて弦いた。

そしたら男の方が。

「つてか今いるわけないって。あいつスキップ受けるつて今頃1高にいるつて。」

「つてかあいつそんなんに頭良いん?」

「マジ不公平じゃね? あいつスキップ出来るぐらい頭良いって? 俺も受けてみるかな?」

「コウジジヤ無理だつて。」

ギャハハと品のない笑い声で。女の方が言つ。

そして。

「まあ私らには関係ないつて。」

そいつらは確かに言つた。

あいつの名前は「泉野」だと。

そういうえば聞いた事がある。

金髪姉ちゃんの武勇伝。

名前も名乗らずお礼を言つ暇もないぐらにカツ「良くなつていいく姉ちゃんの話。

そしてそいつらの話によれば今口はスキップの試験らしきじゃないか。

俺は金髪姉ちゃんが確かに府立1高に入つていいくのを見たんだ。

よーーーし。

俺の出番だな。

そつ思つて1高の門を潜つた。

府立1高校の校長といえば。

狸親父の異名を持つ狸みたいな嫌な奴だった。

俺の兄貴も1高出だから当然俺も其処に行くだらつと親は思つてたに違いない。

だけど反旗を翻したからつちの親より1高の狸親父が慌てふためいた。

「 真田のおぼっちゃん。」

と呼ばれてる俺は昔はどうしてそつなかサッパリ判らなかつたが。今ならわかる。

府立のくせに1高は3セクなもんだからいつも厳しい経営状態だつた。

うちほしきの親が若いときにたてた一応プロダクションの名が付く会社を経営してて。

この時は売り出し中の歌手が鳴かず飛ばずの時期で結構経営は厳しかつたように思うけど。

元々歌うたいだつた母がすっぱり一線を退き裏方へと回つたお陰でうちほどしきにかこうにか金持ちではないけれど他を援助できるぐらいの資金があつたため。

そして兄がこの高校に行つたもんだから言わざと寄付金を出すと。

狸親父の奴うちの金で経営をどうにかこうにか持たせていたらしい。

狸親父の悪いところは生徒のためを思つての行為なのにそつは見えないところだつた。

生徒側から見れば要らない用具を購入して単位を増やし教育に力を

入れる。

そんな嫌な奴が狸親父だった。

本当は志は高かつたはずの狸親父が単なるスバルタにしか見えないのか。

それが俺には疑問だつたし。

それをうちの親も頭をかしげ。

「…前田さんは見かけと言動でだいぶ損をしているな。」

そう言つていた。

ただうちの親は正しい人だから前田の狸親父は悪どい訳じゃないと

判つてゐるみたいで。

多分今年だつて援助するだらう。

応接室に入つた泉野が見えた。

そして数分も経たないうちに胸を張つて出てきたのが遠くの俺からも見えた。

俺は階段を下り渡り廊下へと移動して。

… 泉野とすれ違つた。

… 背が高かつた。

… 綺麗な指をしていた。

そして俺は泉野の後姿に。

手をかざして絶対振り向かせてみせると誓つ。

そして泉野が出てきた応接室をノックした。

「失礼します。」

「これはこれは真田のおぼっちゃん。」両親はお元気ですか？」

部屋に入ると前田の狸親父は小さい瞳を精一杯見開き。

俺が部屋に入ったことを驚きの表情で見て。

でもすぐに取り繕つて。

穏やかに見えそうな表情をつくり。

そう言つた。

「前田さん。今の奴は？」

俺は单刀直入に言つた。

前田の狸親父は俺の顔を見つめて。

「…泉野ですか？」

そう言つた。

「そう。泉野。」

「ああ。あいつは今日スキップの試験だつたんですが。

何か理由があるらしいんだけど頑固で理由を言わないんですよ。

大幅に時間は過ぎてるし何らかの救済措置だつて確固たる理由があればとれるけど。

でもまあ元々あの金髪にピアスで団に入つてたつて言つし。

私にとつては好都合で追い返してやりましたよ。」

「ただ意外だつたのは。

前田の親父は続ける。

「ただ意外だつたのは泉野は言い訳も何もしなくて。

ただ遅れました。すみません。試験は無理ですよ。

そう言つだけでした。」

別に苛めてるわけじゃないの。」

前田の親父は言つ。

俺には泉野の姿が見えるようだつた。  
何も言わずただ頭を下げるだけのあいつの姿が。

「言ひ訳すればもう少し可愛げがあるの。」

前田の親父は言つ。

でもそれが泉野だから。  
それが潔いあいつの姿だから。

「前田さん。あいつはね。」

俺は事の次第を話した。

あいつは駅で人を2人も助けて。  
名前も名乗らず自分が遅れてる」との素振りも見せず。  
綺麗な技で悪党をやつつけて。

巷では金髪姉ちゃんの武勇伝は有名だと。  
俺だつて実際に見るまで信じられなかつた。

「へえ～～。あの泉野がねえ。」

前田の親父は言った。

感心そうな声を上げ。

「だつたら素直にそう言えれば私だつて……。」

ブツブツと呟く。

「あいつはそんな奴じやないから。」

俺はサッパリ泉野の事は知らないけれど。

そう思つたんだ。

「あいつはきつと言い訳をするようなみつともない真似をするぐら  
いなら最初から人を助けたりしないだろうし。あいつはきつとただ  
人を助けたかつただけで賞賛を得たかつた訳でもなかつたんじやな  
いかなつて俺は思つんですけど。」

賞賛を得たかつたならきつと初めから名前を名乗つただろつ。  
助けを受けた女人に恩を着せて。  
多分そして言うんだ。

「私はあなたたちをスキップの試験に遅れてまで助けたんだよ。」  
と。

泉野はただ。

ただ一言「やべつ」と呟いて。  
此処まで歩いてきた。

そして校長の前田の親父に何も言わず。  
胸を張つて帰つて行つた。

「前田さん。」

俺は前田の親父を見つめ。

「俺は多分1高には入らないと思つけど。

俺が入る入らないに関わらずうちの親は援助する氣でいますから。  
だから芽を摘み取らないで下さいね。 泉野の。」

俺はね。あいつがいい事したのに報われないのが嫌だつたんだ。  
誰にも認められないの人に人を助けられるあいつはきっと人一倍傷つ  
いてるから。

自分のことを投げ出してまで人を助けられるだなんて凄くない?

俺が部屋を後にすると前田の親父は早速泉野に連絡したらしい。  
報われないことは無いって泉野に伝えたかった。

誰かが君のこと見てるからって伝えたかったんだ。

その帰りだったか丁度俺の地元の友達に会つたんだ。  
その友達は木村鞠子・聖子という双子の姉妹で。  
俺は何かとこの双子の姉妹に相談を受けていた。  
特に聖子の方は俺に好意を持つてくれていて。  
一度も告られたことは無かつたけど。

そういうのってどうしても感じてしまうものだから。  
だからって俺は好きになつたらモーションを自分からかける方だから。  
だから絶対友達以上にはなれないって思つてる。

「一矢君こんなところで何してるの？」  
鞠子の方が俺に問う。

だつて俺が1高の門を出たところだつたから。

「鞠子ちゃんと聖子ちゃんは？」

我ながらバカな問いをしたと思つけど。

「変な一矢君。だつて私たちこここの生徒だし？」  
聖子が訝しげな眼差しで俺を見る。

「そういえば私たちのバンドのボーカルって当てがある？」  
加えて俺はプロダクションの息子だから。

以前からバンドを組みたかった鞠子と聖子は俺にボーカルの当てを  
聞いていた。

そこで閃いたんだ。  
あいつにボーカルやらせること。  
まだ俺は面識ないし。

だけど絶対落としてみせるって自信はあった。

「何ニヤニヤしてんのよ。」

「いやいや。今度の新入生に楽しそうな奴が入ってくるから。

だからそれを聖子ちゃんたちのボーカルに当てたら面白そうだなあつて。」

「ひょっとして泉野？」

勘の良い聖子があいつの名前を出すからぎょっとした。

「新入生で楽しそうなのって泉野ぐらいじやん？」

「聖子ちゃん知ってるの？」

「知ってるも何もかなり有名。

あいつ強いのにそれを誇らないんだって？  
私の友達も助けられたって言つてた。」

ねえ？と双子の姉を見つめる。

鞠子ちゃんも別で助けられた人を知つてゐらしい。

「じゃあ。2人とも俺がもし泉野連れてきたらボーカルにしてくれる？」

2人とも間髪入れないで頷いた。

「私。泉野嫌いじゃないよ。」

「私も。」

どうせならかなりインパクトあるのがメインが良いよねって。  
2人とも一いつ返事だつた。

そして2人とは1高の門の前で別れた。

あいつ強いのにそれを誇らないんだって。

聖子の声がこだまする。

こんなに世の中腐りきつてゐるのに。

あいつは。

あいつだけは昔のように光を放つてゐる。  
絶対に誇らないその姿は。  
今の世の中に絶対必要。

俺は改めて誓つた。

## 不思議なことに 1

不思議なことに聖子も鞠子も一番メインのボーカルをやりたがらなかつた。

そういうえば近頃のバンドは歌がへたくそで演奏が下手ででもルックスだけで持つてる女優の片手間みたいな歌手が多くて、バンドも多くて。

それに辟易してるんだって鞠子がいつか言つてた。

鞠子も聖子も歌は別に上手くないからつて俺に最初に話を持つて来た時に言つてた。

だつてそれならバンド組んでも楽しくないんじやないつて聞いてみたら。

歌の上手いルックスだけじゃない面白いボーカル探してよつて言われたんだ。

そして今日の前に憧れてた泉野が立つてゐる。

場所は1高の会議室。

所在無さげな面持ちはあの人を助けてた勇ましい姿とは打つて変わって。

だけど瞳だけは鋭かつた。

「…何の御用でしようか?」

泉野つて礼儀知らずで。

それは周りの印象。

きっと一矢君吊るし上げ食らうわよ。

それは友達のミサが言つた言葉。

でも違つた。

初めて聞く泉野の声は低くなく高くなく人を惹きつける声をしていた。

「ねえ？ボーカルやる気ない？」

鞠子が授業を抜け出して会議室に来ていた。

「は？意味がわからないんですけど？」

泉野は鞠子を振り向き応えた。

「あのや。俺たちバンドのボーカル探してて…。」

「…あの公募してたのですか？もう決まつたって訊きましたけど？」

「…あれは名目で本当は君にやってもらいたいんだ。俺たち。」

眼光鋭く俺を見上げ。

泉野は興味ないと一言言つた。

困ったな。

そう思つたとき校長の狸が入ってきたんだ。

## 不思議なこと⑥ 2

「泉野さん。」

真田の狸親父が泉野の名前を呼んで。

泉野は教室に帰ろうとしていて。

振り返った。

「何ですか？」

前田の狸親父は苦笑いを浮かべながら。

「私はね。君に別に我が校に入つて欲しい訳じやなかつた。」

そう言い出した。

泉野は眉根を上げ。

「私だつてまさか受けさせてもうるるなんて思つてなかつたです。」

そう切り替えしたから。

俺は面白くその状況を見ていた。

「でも。」

前田の親父が続ける。

「でも君は善行を言わなかつた。きつと言つ必要がないと判断したんだろう。

君のその行動は感心できる。

そしてその状況を私に知らせてくれた厄介者がここにいるんだ。」

俺かよつ！

思わず突つ込んだつて。

だけどとても突つ込みを入れられるような状況じゃなかつたから俺は黙つてみてたんだ。

泉野は俺を軽く見上げ。

余計なこと言いやがつてな顔を向けた。

へえへえ。

余計な事して済みませんでしたね。

俺は視線で返す。

泉野は口を開いた。

「私は別に賞賛を受けたかった訳じゃなく。

って言つても誰も信じてくれないから何も言わないだけで別にそれが美德だとも思つてません。

ただ私が出来得ることをたまたましただけで。

私は親のお陰で強く育ったのに何にも出来なかつたら悲しいから。

「

君はそう言つたね。

俺はあんまりじりじりて噴き出しちやうだった。

そんな俺を制して。

言葉を紡いだのは鞠子だった。

「泉野さんはユニークだよね。」

## 不思議なこと⑥ 3

「だつて本当に田の前にするまで私は君の事誤解してたよ。」  
鞠子が言葉を続ける。

「人助けする人つて大体名誉勲章欲しくない？」

モラルの低下から湊府はこの程名誉勲章なるものを定めた。  
人助けをした人には名誉勲章と金一封が与えられる。

自薦他薦問わない。

「何ですか？その名誉何とかって？」

「えつ？知らないの？君高校生にもなつて？」

鞠子の何気ない言葉は泉野を困惑させた。

「だつて私スキップだから。この前まで中学生やつてたから。」

名誉勲章は高校生以上だつて湊府は但し書きを添えた。

それはそれを取らせたい親のある意味リミッターだったから。

「…君幾つなの？」

鞠子は困惑の表情のまま。

泉野にそう訊いた。

「13です。」

泉野は大人びた眼差しのまま。

そう答えた。

俺だつて驚いた。

若いとは知つてたけど。

自分よりも二つも三つも年下だなんて。

「…もういいですか？」

泉野は本気かよ視線の俺たちに耐え切れなくなつたのか。  
自分から話を打ち切らうとした。

「俺。諦めないから。」

その泉野の後姿に。

俺は一言そう言つた。

何に？

今の時点ではわからないけど。

でもとりあえずあいつを説得してみせる。

泉野が去つた後。

鞠子が呟いた。

「強烈…。だけど本気であいつにボーカルやつて欲しい。」

「でしょ？」

俺は鞠子にいやつと笑い。

次の手段を考えたんだ。

俺は絶対あいつを落としてみせる。

「…懲りもせぬまた来たんですか？」

泉野は眉根を寄せ。

泉野の家の道場に顔を出した。

俺にとつては伏線で。

泉野にとつては予想外の行動だった。

泉野のお父さんは道場の主で。

段持ちの強面だった。

でも俺は過去を知ってる。

うちの親が言うには。

昔は大手のプロダクションだった泉野のお父さんは。  
当時歌うたいだった彼女を見初め。

俺の親父に勝つて結婚した。

その後俺の家が泉野の家を吸収合併して。  
今に至る。

泉野のお父さんは強面で。

初めは俺を見て眉根を寄せたけど。

俺が真田の息子だと挨拶をすると態度が軟化した。  
それを見て事情が飲み込めない泉野は更に困惑した。  
きっと俺が追い返されるだけだろうと思つていたに違いない。

「…

そうは問屋は卸さない。  
だつて俺言つたでしょ？」

諦めないからって。

「俺ね。泉野さん。」

眉根を寄せて組み手をする俺は泉野に語りかけた。

「絶対諦めなって言つたでしょ？」

泉野さんみたいに強くなりたい子つて沢山いると思つんだ。」

逆風に負けない。

世間に染まらない。

だけど勇気が無い。

「俺はメディアに泉野さんが出て。

その勇気を配信して欲しいんだ。」

「私はそんな事望んでないし興味ない。」

「…判つてるよ。そんな事。」

君がそんなの望んでない事も。

君が目立ちたがり屋じゃないことだつて。

「だけどね。鞠子ちゃんや聖子ちゃんはそういう言わなかつた。

泉野さんにボーカルやつて欲しつつ。

泉野さんじゃなきや要らないつて。

泉野さんがやらないうなら夢だったバンド組むのも諦めるつて。」

「そんなのそちらの勝手じゃないですか！……」

泉野は流石にキレた。

運命を勝手に託されて。

夢を持ち出してきてと酷いと思つてたんだつ。

「…君はわざわざ真理を怒らせに来たのか？」

流石にその様子を見ていた泉野のお父さんが口を開いた。

「いいえ～？ だつて楽しいじゃん？」  
いまどき珍しく純粋な瞳は。

「泉野さん。俺ね、高いじゃないから放課後しかあいつを捕まえられないんです。

だからわざわざ来てるんです。  
地位や名声を欲しい訳じゃないってあいつ見てたらよく判ります。  
あいつがメディアに出たとき、世間は驚くだろうと想つ。  
俺はあいつが好きです。」

ポロッと出た本音に。

俺自身も焦つた。

だつて泉野の親相手に言ひ台詞じゃないから。

「昔の俺そつくりだな。」

泉野の親はそう呟いた。

「それは光栄ですよ。泉野さん。」

泉野は決して人に媚びないから。

泉野が道場を出て行つた後の扉を見つめ。

「俺。人を好きになるつて本当はどんなんか知らなかつたんだ。  
多分そいつの事だけ特別つて思うことなんだとは思うんだけど。

俺は泉野が好き。

多分それだけでいいんだと思つんだ。」

どうせ胸中がばれたから。

仕方ないから全部吐露した。

「恋愛感情なら君は真理に求めるんだろ？」

「いいえ～？俺これでも古風なんです。

結婚するまで求めません。

自制はきかせますから心配しないで下さい。」

「例えば真理と2人つきりになつたとき。

君はちゃんと出来るつて言うのか？」

「残念ながら俺の両親は俺たちをフランクには育てなかつたんで。大好きな人と2人になつても大丈夫だという証が無ければ。

多分俺のこの思いは潰れると思う。

俺の両親はきっと俺を許さないだろう。

そうなると困るんで俺は出来るだけ泉野とは2人きりになりません。

ん。

ちゃんと俺がやつてると認めてくれる人を誰か立てます。

今日みたいに堂々と泉野のお父さんとかね。」

俺の思いは間違つてないと思う。

あいつが好き。

ただ単純にそれだけだから。

校門の前でまた俺は泉野を待つてると。  
クスクスと笑いながら通つていく女子高生が沢山いた。  
泉野は良い意味でも悪い意味でも有名だつたから。

その中で一際目立つ眼差しを俺に向けてきた女子高生は間違いなく  
犯罪者の目をしていた。  
俺に憎悪のまなざしを向け何かをたくらんでる表情で。

「泉野は来ないよ。」

そう一言だけ俺に発し。

薄ら笑いを浮かべ背筋がゾッとした。

泉野は来ないよ。

その意味は？

道路の反対側に田を向けると泉野が走つていく姿が見えた。

何処へ行くんだ？

だつてあつちは不良の溜まり場で有名な地域で。

そりや泉野は団に入つてたつて言つけれど。

それにもしても……。

「あんたお節介だね？」

さつきの女が気づけば俺の前を走つていて。  
なかなか追いつけなかつた。

「…良いよ。やれよ。」

泉野の声がした。

潔い泉野の声がした。

その視線の先には。

三人もの男が立っていて。

そしてその時には勝手に体が動いていた。

助けなきやとか。

守らなきやとか？

そんな使命感じやなくてただ単に体が勝手に動いて。  
俺たち有段者が本当は使っちゃならない技で。  
でも技を男にかけた直前に俺は気づいて。  
力を極端に抜いたから。  
体に激痛が走った。

「一矢！！」

判つてゐる。

本当は激痛が何で走つたかとか。  
あのままじや足が完全にイカれる事だつて。

バシッ！！

泣きながら俺のために女を殴つた泉野は。  
肌蹴た服そのままで。

そして泣きながら俺に言った。

「何で助けてくれたの？」  
決まつてゐる。

俺は泉野が好きだから。

「一矢。痛いなあ。

早く病院連れて行くから。」

痛みで朦朧とする意識の中で。

泉野が俺の名前を呼んでくれることに妙に感動を覚え。

ああ。怪我のし甲斐があつたなんて思つたんだ。

泉野に怒られそうだけど。

そして泉野は俺のこの怪我を考え方の転機にして。初めは期限付きでバンドを結成した。

名前はWAIT FOR YOU。

これは由来は何かとは特に聞いた事はなかつたけど。聖子と鞠子が年上のお姉さんらしく泉野に名前を付けることを譲つたから。

いつも両手を広げそこで待つてゐるあなたは。いつも私を待つていてくれた。

苦しいとき辛いとき。

ずっと待つていてくれた。

あなたはまるでシンデレラのようだね？

灰かぶりと呼ばれ疎まれて。

でも澄んだ瞳は変わらず。

何にも誇らず。

私はあなたのようにになりたかったのかもしれない

：

泉野たちの「ナビゲーター曲はバンドと同じ名前だった。

CDを作つた瞬間に売れ始め。

俺の予想通り週間チャートで1位を取つた。

キヤッチフレーズは金髪姉ちゃんが奏でる愛の歌。反吐が出そうなフレーズだけど泉野は顔を赤らめ。もう少ししゃってみようかと言つた。

泉野はこの頃学校で友達を失つて。

その時も運良く俺は其処に居合わせることが出来て。  
病院でずっと肩を抱いていた。

はらはらと涙を零す泉野は普通の少女だった。  
いくら強くてもまだ13の少女だった。

「かあるが言つたんだ。 真理は人を勇気づけられる何かを持つてる  
から。 つて。 」

だから。

そう泉野は言つた。

「だから私はデビュー曲も出せたからもつ少し頑張つてみる。 」 つて。

実際は売れる人間なんて一握りで。

デビュー曲は売れてもその後が続かない人間なんて五万といいるから。  
だけど泉野は失つたかあるという子に誓つた。  
そのかあるという子が泉野を襲わせたチンピラを雇つた張本人の井  
上光子のお姉さんだと気づいたのはだいぶ経つてからの事で。

俺の印象はすこぶる悪くて。

井上光子には近づくなと何回泉野に言つても泉野は薄く笑つて。

「大丈夫だつて一矢。 」

そう笑つて言つから。

俺はどれだけ心配した事か。

それから。

それから結構泉野は波乱万丈の人生を送つていいく。

まずは泉野の両親が心中した。

それは正確には泉野のお母さんが泉野のお父さんを殺して。自分は昔の泉野プロが在った場所から飛び降り自殺をした。

泉野は初のツアーワンツーで。  
でもそんな事言つてられなくて。  
その連絡を受けた時泉野は泣き崩れると思つた。  
だけど薄く笑つて。  
我慢するから。

聖子がキレタ。

「どうして我慢するの？？泣いたつて良いじゃない？」  
その様子を泉野は見て困惑した。

「私は大丈夫だよ？」

「だつて何で泣かないの？悲しくないの？」

聖子は気性が激しくて。

もうどつちがどうなのか判らないぐらい取り乱した。  
だけど純粋に泉野を思う気持ちは人一倍あって。  
だけど。

きっと今の泉野には重すぎて。

でも大人びた泉野が言つ。

「聖子。ごめんね？」

そう言つて泉野はツアーワンツー抜けた。

残された聖子は咳く。

「何でなんだろうね？私こんな事が言いたいんじゃないのに。」

「真理が強くて滅多に弱音吐かない事で私たちは救われてるのに。」

俺は何も言えず。

聖子を見ると。

聖子が近寄ってきて。

「ねえ？一矢君。私のこと真理の代わりに抱いてもいいよ？」

そう言つた。

聖子が俺に好意を寄せてくれる事は知つてたけど。

こんなあからさまに言われるだなんて思わなかつたから。

俺は戸惑い聖子を見た。

「だつて一矢君？真理の事好きだけど手を出せないんでしょ？」

そうだけど。

そつ思ひつと聖子が俺の手を掴み自分の胸元に持つていつた。

正直柔らかかったし。

正直胸は大きかったし。

でもね。

俺は意を決して聖子に胸から自分の手を離して。

「聖子ちゃん。俺ねそんなことしたらきっと泉野にもう好きだつて言えなくなっちゃうよ……。」

だつてやつとの思いで。

男の欲望は計り知れないから。

俺は泉野のお父さんに言つたから。

泉野のこと結婚するまで求めませんつて。

「俺弱いから誘惑しないで欲しいよ。

聖子ちゃんプロポーション抜群だし可愛いからくらべらつて来ちゃうよ。

だけど俺は泉野が好きなんだ。」

聖子は溜息をついて。

「そう言つと思つてた。」

そう呟いた。

「それでこそ私の好きな一矢君だ。」

泉野がツアーを抜けると基本俺たちがやる事も限られてくるのでもうフに入つた。

泉野はダメージがでかすぎてもしかしたらこのままボーカル辞めてしまふかもしれないってチラッと鞠子が呟くと。

聖子が怒つてそんな事ない。あいつは強い奴だから必ず立ち直つてそう強く言つたから。

泉野を信じる気持ちは鞠子より聖子の方が強いと知れた。

俺だつてチラッと辞めちゃうかもなつて思つたりするけど。

聖子のように待つのも良いと思つ。

バンドの名前に恥じないよ。

俺は恥ずかしかつた。

少しでもあいつがこのまま潰れてボーカル辞めてしまふかもしれな  
いつて疑つた事が。

1番信じてやらなきゃいけないのは1番きっと泉野のことを好きな  
俺な筈なのに。

そんな自分のことで我慢を言つた事があいつは無こと知つてゐる

。

「めんな。泉野。

そして俺が悔いでるうちに泉野は戻つてきた。

泉野は俺の顔を見てすぐにこう言つた。

「一矢。次の土曜ライブ出来るかな?

ウエイトフォーコー復活ライブ。」

そう言う泉野の横顔は試練を乗り越えまた強くなっていた。  
どうしてだろう？

神さまはこんな小さなまだ13歳の少女に試練を与えるのだろう？  
背は高くて強い眼差しで生きている泉野を。  
これ以上苦しめないで。

強い泉野に俺たちは救われてゐるのに。

そして復活ライブは予定通り行われ大成功を収めた。  
泉野は開口一番ファンのみんなにこう言った。

「みんなただいま！！

ありがとうございます！

みんなが待つてくれたから私は途中で辞める訳にはいかなかつ  
た。  
本当は凄くショックで心が壊れてしまつたかもつて思つたんだけ  
ど。

だけど私このバンドが大好きなんだ。

私みんなが大好きで。

その事を再確認したんだ。休んでる間。

熱い歓声と鼓動。

俺は泉野の後ろで座つてギターを持っていた。

泉野の後姿は何だか戦場へ立ち向かう女戦士みたいに見えた。

良かつたね。泉野。

本当に心が壊れなくて良かつたよ。

## 復活ライブ 2

それから。

復活ライブをしてやつとバンドが軌道にのってきた頃。

今度はライブ会場の襲撃事件に遭つたんだ。

俺はその時幸いなのか何なのか判らないけど写真家の叔母の家にいて。

まだ治りきらない足の怪我に悩ませられながら写真の課題をやつていた。

すると先の話に出た泉野の強姦未遂事件の張本人の井上光子が訪ねてきて。

ライブの襲撃事件を教えてくれた。

俺はそんな事とは知らないから井上光子が現れた途端。首を締め上げていた。

井上光子は当初会つたときの犯罪者のような眼差しは影を潜め。変わつて大きな瞳は微かな光を放つていた。

「私の所為で泉野…。

つていうか私が雇つたチンピラが泉野のこと恨んでて。

私あんなヤバイ奴らだつて知らなくて…。

銃を持つて泉野のバンド会場襲撃して…。

これが病院の……。」

俺は其処まで聞くと上着を持つてそのメモを貰い。駆け出した。

泉野は怪我をしたのか？とか。  
命に別状はないのか？とか。

聴きたいことは一杯あつたけど。

目の前の井上光子は今にも倒れそうに顔色が悪くて。

俺は井上光子を責められなかつた。

教えてくれただけありがたいつて思えたんだ。

俺は井上光子を許さないつて思つてたのに。

「一矢！…」

後ろで叔母の声が聞こえたけど。

無視して走つた。

中央病院は閑散としてた。

閉まる直前の病院は嫌いだ。

其処に佇む泉野を発見した時。

俺は死ぬかと思つたんだ。

無事で良かつた。  
俺つて浅はかで。  
本当に。

泉野は瞳を腫らじて佇んで居た。  
思わず声に出たのは。

「無事で良かつた。」「  
そればっかり。

「…一矢。」

泉野は力ない声で俺の名を呼び。  
両手は血で濡れていた。

ライブ最中の事件だつたから泉野は肩の大きく開いた衣装のまま。  
化粧は中途半端に落ちて。

「私ね。守られてばかりだつたんだ。  
有段者のくせに動けなかつた。」

自嘲気味の抑揚のない声と。  
力ない震える腕。

「どうして? どうして私じゃなくて私の周りだけこんなに……。」

悲痛の叫びは病院内全体に響き。

「どうして私だけ無事なんだ?」

俺は無言で抱きしめた。  
良かつたと。

泉野じゃなくて良かつたと思つ自分がいて。  
こんなにも愛していて。  
狂いそ'うで。

「一矢? 泣いてるの?」

俺は涙を氣づけば流していた。

それは安堵の涙。

「こんな事言つと真理は絶対怒ると想つた。」

俺は前置きつきで。

「真理じゃなくて良かつた。」

「！－！一矢！本気でそんな事言つの？」

「ああ。本気。だつて俺泉野真理が好きだから……。」

真理は顔を紅くして。

「こんな時に不謹慎だ！－！」

つて怒るから。

だけど俺は。

だけど俺は言わずにいられなかつた。

だつて今出来ることやらないと出来なくなる」ともあるつて事。  
忘れてた。

こんなにも深く真理は俺の心に棲みついて。

狂いそうなほど大好きで。

心臓が止まるかと思うほど事件を聞いてびっくりしたから。  
告白は今しかないと思つたんだ。

ICUの前。

鞠子が駆け寄つてきた。

「一矢君。真理。」

鞠子の顔は青ざめていたけれど。

「聖子は峠を越したつて。

今からリハビリが大変だらうけど命に別状はないつて。」

その鞠子の表情は静謐そのものだった。  
真理は唇をかみ締めた。

君は俺の隣りで白い壁を見つめ。

「…鞠子。」じめんつて聖子に伝えてくれる?」

そう言つた。

「…構わないけど会つて行かないの?」

鞠子は静謐な表情で真理に言つ。

真理は首を振つて。

「あわせる顔がないよ。」

そう言つて力なく笑つたから。

「だつて私。一矢にも言つたけど有段者で。

他の人間よりずっと強くて。

それなのに足が竦んで動けなくて。

自分が臆病なの判つてたはずなのにもつと機敏に動いてれば聖子  
じやなく私が撃たれたかもしれない のに。」

人を助けられない重みはこんなもんじやないけど。  
自分が人に助けられて生きるだなんて最低だ。

真理はそう言つたから。

そこまで黙つて聞いてた鞠子が静かな声をあげた。  
芯の強い鞠子が声を荒げるのは初めて見た。

「だつたら助けた価値無いでしょ?」

たつた一人の血を分けた妹の弁明を姉がする。

「聖子は今気が付いて私に言つたんだよ?」

真理は無事かつて。

私が無事だつて答えたなら良かつたつて言つた。」

一呼吸置いて鞠子は続ける。

「聖子はマドラムスだつたから両肩負傷でひとつもマドラムは叩けないつてお医者さんから言われたから

それを伝えたら真理が無事だつたからいこやつて言つてたんだよ？  
それなのに会いもせず逃げるの？

聖子は本当に一番真理の事好きなのに。  
姉の私よりね？」

「真理。」

俺はそこで口を挟んだ。

「真理。助けてもらつてお礼も言わずに帰るのはどうかと思つた。」

「煩い！一矢。」

真理の小さな肩は震えていた。

怖くて怖くて。

声も上げず泣いていた。

「…だつて私聖子にどう謝つていいかなんて判らない。」

「お禮でいいんじやないの？

素直に助けてくれて有難うつてそれでいいんじやないの？

鞠子が真理を立たせてエヒコの中に連れて行つた。

後に残された俺は胸を撫で下ろし。

「心臓が幾つあつても足りんわ。本当に。」

そう思つた。

## 活動開始

あいつを愛すると決めた時からずっと。  
それこそずっと。

あいつを愛するにはそれなりの覚悟がいるって知つてた。  
トラブル体质なのか单なる偶然なのかわからないけど。  
あいつは過酷な運命を背負つて生きていく。  
前だけ見つめて。

本当は襲撃事件のとき真理の心は砕けて。  
芸能界によくいる麻薬中毒者か。

はたまた自殺願望者になるかもしけないって俺の中で警鐘が鳴つた。

立ち直る勇気は何処からも来ないって思った。  
芸能界つて残酷で。

自殺願望があるみたいなテーマはひつきりなしに流れてて。  
泉野真理はドラマスで潰れたみたいなことは新聞にだつてでかでか  
と流れた。

それだけ注目度の高いシンガーになつたと同時に。  
それだけ格好の獲物になつたとも言えるんだ。

そこへ現れたのは。

紛れもなく真理の血を分けた姉の結花だつた。

結花さんは俺のことを一矢君と呼ぶ。

真理と似た声で。

真理と似た顔立ちで。

「一矢君。真理の事お願いね？」

私公務員だから飛ばされかけやつけど。

遠くからでも真理のこと応援してるから。

だからお願ひね？

結花は両親が心中した責任と。

真理がやつてたバンドが襲われた事と。

その責任を一身に背負つて遠くの町に飛ばされた。

愛する人には振り向いてもらえなかつたと涙を堪え俺に言った。

「だけどね。一矢君。

私幸せなの。先生になるのが夢で。

あの人のお嫁さんになるのも夢だつたけど。

いつかは諦めなきやならないつて思つてたから。

諦めが悪いからいつもね。」

真理とは違う眼差しはそれでも光を称えてた。  
こんなにも真理とは違つけど。

そして冒頭に戻り。

俺は真理にプロポーズして。

結花を探しに行って。

感動の再開を果たすんだ。

いつの間にか目の前は桜の舞う時期となり。

その時期に俺たちは新しいバンドメンバーを迎えて再開する。

新生WAIT FOR YOUの活動開始だ。  
みんないくよ。



## 活動開始（後書き）

次回真理の話へと続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8788e/>

---

桜の木の下で

2011年10月5日02時24分発行